病院図書館　2010:30(2):83-87

総会記念講演

ベアトリクス・ポター（Beatrix Potter）の遺産

眞方　陽子

Ⅰ．はじめに

今回のテーマを決めるに当り、他にも好みの作家・画家がいたり、ギリシア神話のハイライトを美しい壺絵で紹介してはどうかと考えたり、大いに迷いましたが、一人の女性が一生の間に情熱をかけて三つの仕事――〈絵本作家〉〈カントリー・ウーマン〉〈ナショナル・トラストへの貢献〉――をなし、いずれもが後生の私達にとり掛け替えのないものとして遺された点を考え、ベアトリクス・ポター（以下BP）に焦点を当てることにしました。

Ⅱ．絵本作家への道

19世紀英国の、アッパー・ミドル（中流の上）の家庭に生まれ育ったBPの家庭環境がどのようなものであったか、見ておく必要があるでしょう。ロンドンの大きな屋敷の中の子供部屋は、BPが後にW.ヒーリスと結婚するまでの47年間慣れ親しんだ教室兼アトリエでした。娘は学校に行かないのが普通の時代でしたから、BPも専属の乳母に世話をされ、勉強は家庭教師に見てもらい、絵の先生も付けてもらっていました。他の子供を知らずに育ったBPは、毎日犬を連れて乳母と一緒に、近くのケンジングトン公園へ散歩に出かける、繊細で病弱な子供でした。6歳下の弟だけが唯一の友人で、友人の代理となってくれたのが子供部屋で飼っていた小動物（カエル、トカゲ、イモリ、コウモリ、カメを含めて）でした。BPはシェイクスピアの作品を暗記したり、日記をつけたりもしましたが、日記は暗号を使ってつけていました。15歳から30歳までの暗号の日記をレズリー・リンダーが1958年解読に成功し、その後出版もされました。

BPが『ピーター・ラビット』の私家版を出したのは1901年35歳の時ですが、この作品が生まれるまでには、BP幼少時からの動植物との関わり、ペットの飼育、観察、記録という背景がありました。父からも母からも絵の才能を受け継いでいたBPは、ペットの動物でも野原の植物でも、何でも観察しては描いていました。

BPの両親は、どのような生活をしていたのでしょう？父親のルパート・ポター（Rupert Potter, 1832-1914）の父に当たるエドマンド・ポターは、木綿捺染の大工場を経営するまでになり、キャラコのプリントでは国外にも名を知られていました。BPの父はその家業に加わらず、法曹の道に進み、修業時代を経て25歳で法廷弁護士（barrister）になりますが、生涯殆どその仕事はせず、ロンドンで紳士（gentleman）の生活を楽しみました。教養人との社交、絵の蒐集、劇場通いという趣味の生活に励み、BPも展覧会や画廊へよく連れていってもらったそうです。父親が最も熱中した趣味は、写真でした。当時の写真機は大変重く扱い難いものでしたが、運んでくれる使用人のいる家庭でしたから、旅行先でも撮影可能でした。変わりゆくロンドンの街、家族、友人をモデルに多数の写真が残され、整理もよくされていて、百年以上経っても、大変貴重な資料となっています。

母親のヘレン（Helen Leech, 1839-1932）も綿花で財をなした資産家の娘で、ロンドンで社交

まがた　ようこ

の輪に加わり多忙でした。貧富の差が激しくなる英国経済の過渡期に富裕階級の家庭に生まれたBPは、豊かさの恩恵を享受したことになりますが、富に身を持ち崩すようなことは決してなく、並はずれた才能を生かし、極めて現実的な判断力と生真面目な程の自制心を備えて、自立した女性の一生を送ったと言えます。

BP一家の家族旅行にも触れなくてはなりません。特に毎夏の避暑生活は、BPに大きな影響を与えました。5歳から15歳はスコットランドへ、16歳から25歳はイングランドの湖水地方（Lake District）へ、26歳から28歳は再びスコットランドへ長期間出かけています。BPは自然に夢中になり、森の探検をし、兎を捕まえ馴らし描き、ロンドンに連れ帰り、死んだ場合は皮をはぎ煮て骨を残し、骨格研究をするという徹底ぶりでした。

避暑地では屋敷を借りて、父親が知人客人を招いて政治、宗教、絵画、文学を論じることをよくやり、BPにも大切な知人、友人と出会う機会となりました。

一人はH・ローンズリー牧師（Hardwicke Rawnsley 1851-1920）で、湖水地方の自然保護に力を注ぎ、後に設立するNational Trustの準備もしていました。

もう一人は、BPがスコットランドで友人となった地元の郵便配達人Ch・マッキントッシュ（Charles McIntosh 1839-1922）でした。彼は茸学者と言ってもよく、菌類学者として今日でも名を知られています。

BPはスコットランドで、魔法にかけられたように茸と化石のスケッチに精を出しました。そして「茸図鑑」を作る夢をもちますが、生前には実現せず、1967年フィンドレイ（W. P. K. Findlay）が『道端と森の茸』を出版した際に、BPのスケッチ59枚が使われることになるのです。さらにBPは、「胞子の繁殖」についての新説を評価してもらいたいと考え、リンネ学会に論文を提出します。けれども当時の学会は女性の出席を許さず、論文の代読のみで片付けられる有様で、結局35歳頃まで茸のスケッチは続けましたが、ついに諦めることになるのです。『ピーター・ラビット』に続く絵本作りは、満たされない茸への情熱が源であったと思われてなりません。

BPは27歳の時、3歳年上の元ドイツ語家庭教師アン・カーター（結婚してムア夫人）の長男ノエルに、夏のスコットランドから兎を主人公にした絵手紙を送りました。兎は長年身近なペットで、芸を教えたり、旅行に連れていったり、BPには慣れ親しんだ動物でした。ベンジャミン・バウンサーやピーター・ラビットなどと名づけられたモデルもいました。

この絵手紙を元に私家版『ピーター・ラビット』を出した訳ですが、翌1902年にウォーン社から『ピーター・ラビットのおはなし』が商業出版されました。カラーの絵をつける条件で、出版が可能となったのです。これを機にウォーン社とBPとのつながりが密になっていきました。創設者フレデリック・ウォーンの4人の息子の内長男は夭逝していましたので、残る3人が出版に携わっていました。BPの直接の交渉相手は末子ノーマンでしたが、ウォーン家の未婚の姉ミリーとも親しくなり、BPはウォーン家の明るい雰囲気に魅せられていきます。

Ⅲ. ヒル・トップ農場購入――自立に向けて

39歳のBPにとり、1905年は特別の年になりました。『ピーター・ラビットのおはなし』は大変売れゆきがよく、その印税と叔母の遺産分けでソーリー村のヒル・トップ農場を購入し、そこに住んでいた農場管理者キャノン夫妻（と子供2人）には、引き続き管理を頼み、彼等用の部屋も増築したのです。『あひるのジマイマのおはなし』（1908）には、キャノン夫人と子供達、さらにBPの愛犬ケップも描かれています。

この年の夏の初め頃、BPはノーマン・ウォーンから手紙によるプロポーズを受け、彼女は喜びますが、両親（特に母）は猛反対でした。けれどもBPの決心は固く、双方の肉親以外には

当面公表しないということで、ひとまず落ち着いたのです。

ところが8月末になってノーマン・ウォーンが急逝し、BPには親との対立以上に辛い出来事となりました。ノーマンの死の原因は、悪性貧血とも白血病とも言われています。

40歳を迎えたBPは、暇を作ってはヒル・トップ農場へ出かけました。両親とのつながりはまだ強いものの、新しい人生へ踏み出し田舎での自立した生活を送る第一歩を、ヒル・トップは与えてくれたことになります。

BPは30代のときすでにウォーン社から『ピーター・ラビットのおはなし』(1902)『リスのナトキンのおはなし』『グロースターの仕立屋』(1903)『ベンジャミン・バニーのおはなし』(1904)『パイが二つあったおはなし』(1905)などのよく知られた作品を出版していますが、40代になると、絵本作家と農場経営との二足の草鞋を履くことになりました。

BPは農場経営について、ローンズリー牧師の高地牧羊に対する信念に賛同していました。湖水地方土着のハードウィック種の羊は、高地草原に育ち、冬の寒さ、食料不足に強く、自分の育った農場を忘れず、他に行っても元の牧場に戻るので囲わずに管理できる羊であり、防水性に富むウールがとれるこの種の羊を高地に呼び戻す役を農夫（婦）はするべきで、高地の牧羊を諦めると土地の品質低下を招き景観も維持されなくなる、とローンズリー牧師は懸念し、1899年に「全英ハードウィック種綿羊協会」を設立していました。また、その4年前の1895年には、Missオクタヴィア・ヒル、Sirロバート・ハンターという2人の友人と共に「ナショナル・トラスト」も立ち上げており、BPの父はその最初の終身会員になっていました。

Ⅳ. カントリー・ウーマンとして

BPは、積極的に農場、農地、農家の買い取りをすすめていきました。1909年（BP43歳）には、カースル・コッテジを購入しています。この時購入の世話をしたのが、地元の事務弁護士(solicitor)ウィリアム・ヒーリス(W. Heelis)で、情報提供、契約手続等面倒を見てくれ、BPと親しくなっていきます。ウィリーと呼ばれた彼は、姉3人兄8人の末っ子で、40代後半、やせ型長身のスポーツマンでした。BP46歳の1912年に彼からプロポーズされ、BPの側には何の問題もありませんでしたが、又しても両親（父は80歳、母は73歳）の同意がすぐには得られませんでした。父は法廷弁護士でしたから、娘の相手が事務弁護士では格が合わない、というのも理由でした。この時弟バートラムが伏せていた自分の結婚の事実を告げてBPを励ます側に立ち、両親も遂に同意せざるを得なかったといいます。

こうして1913年秋、47歳のBPはW. ヒーリスと結婚しますが、1911年から1912年にかけてBPはウィンダミア湖での水上飛行機（飛行艇）への抗議行動で超多忙な日々を過ごしていました。騒音、湖の汚染に加えて、荷馬車の馬が驚いて事故が多発し、フェリー運行時にも障害が発生するため、反対運動は熱を帯びていきました。知名度の高かったBPは、署名集め、出版社への働きかけに動きまわり、結局飛行機工場は作らせず、1912年一杯で飛行艇もウィンダミアを去っていったのでした。

BP結婚の翌年、父親が82歳で亡くなり、老母の世話と農場経営がすべてBP一人の肩にかかるようになります。1914年から始まった第一次世界大戦は、農場経営にも様々な影響を及ぼしました。馬は徴用され、耕作人も召集されるため、農場の仕事がスムーズにいかないのです。

そんな最中、弟のバートラムが46歳で亡くなり、BPは寂しさを隠せませんでした――BPと弟は、動物を飼うのも絵を描くのも大好きで、長じてからはどちらも農場経営に関わって農夫（婦）になり、親の圧力にも共同して対抗してきたからです。

やっと戦争が終り、翌1919年BPは80歳の母親のために、ウィンダミアのリンデス・ハウ

という屋敷を購入し、メイド4人、庭師2人、御者（運転手）1人も雇って、共に住まわせることにしました。母親は1932年93歳で亡くなりました。母をウィンダミアに住まわせたことで、BPの生活の拠点がロンドンから田舎へ移り、ソーリー村に活動の根を下していきます。BPもウィリーも地域の活動には積極的で、村の祝い事を喜んで支援し、クリスマスやイースターの行事も歓迎しました。

1919年ソーリー、ホークスヘッド、レイの教区に地区看護婦を派遣する制度（Nursing Trust）を作り、病気の流行や医者不在に備えることになった時も、BPは基金を寄付したり持ち家を提供したりして看護婦を常勤させることに協力しています。この仕組みは、1946年に国民健康保険制度（National Health Service）に引き継がれることになります。

弟を亡くして2年後、BPは幼少時からの知人で、父親とも親しかったローンズリー牧師を69歳で亡くしています。自然保護と田舎の人々の伝統や技術を残す必要性を教えてくれ、ハードウィック種による高地牧羊の大切さを力説した人でした。又『ピーター・ラビット』の絵本を出版するようにすすめてくれ、出版社探しを手伝ってくれた友人でもありました。

V. ナショナル・トラストのために

第一次大戦が終ると、湖水地方では農地や土地を手放す人が増えだし、この地の伝統的な生活様式を残していくためには、自分で土地を購入し管理しなくてはならないとBPは考えていました。1924年にはウィンダミア湖東側の広大なトラウトベック・パーク農場（2000エーカー）を購入、土地の改良をしつつ牧羊に取り組むため、トム・ストーリー（Tom Storey）という腕のよい30歳の羊飼いを「今の給料の2倍出します」と交渉して雇いました。3年後にはヒル・トップ農場へ移って農場の管理をし、羊の飼育をして品評会に出して欲しいと、トムに頼みました。以後、BPの農場の羊は各種の賞を獲得していきます。トラウトベック・パーク農場を購入した際、BPは農場を見まわるために車も買い入れました。運転は母親付の運転手がしてくれ、湖をまわるBPの姿は地域の人々にとりおなじみの光景となりました。

1930年（BP 64歳）には、4000エーカーを超えるマンク・コニストン料地が売りに出され、湖水地方でもこの上なく風光明媚な土地でしたから、いずれ開発の波にさらされることは間違いありませんでした。ナショナル・トラストだけで購入費用の全額は集められず、助けを求められたBPはいろいろと工夫してお金を調達し、一部を自分の所有とすることで、この土地は取得できたのでした。この1930年は、BPが「ハードウィック種綿羊協会」の初の女性会長になった年でもあります。

1939年（BP 73歳）には第二次世界大戦が始まり、その前年位からBPは体調が悪く、リヴァプールの病院に入院をくり返しています。古い家と庭と農場の仕事による過労が第一の原因でした。

1943年（BP 77歳）12月22日の夕方、羊飼いのトム・ストーリーはBPに呼ばれました。BPは、自分の亡くなった後も農場に留まり、夫のために農場経営をして欲しいと頼み、トムは同意したといいます。そしてその夜亡くなったBPの遺灰を、トムはソーリー村の頼まれていた場所に撒き、「場所は秘密に」というBPとの約束を長らく守っていました。けれども1986年3月90歳で亡くなったトムは、晩年息子のジェフリーにだけその場所を明かしていたそうです。ところがそのジェフリーも1988年12月に急死してしまいました。

BP亡き後ウィリーは意気消沈し、1945年8月に亡くなるまで呆然としていた、と一緒に住んでいた人達は伝えています。

〈参 考 資 料〉

(1) *The Complete Tales of Beatrix Potter*, Frederick Warne, 1989.
(2) *Beatrix Potter—— Artist, Storyteller and Countrywoman*, by Judy Taylor, Frederick Warne, 1986.
(3) *Beatrix Potter's Lakeland*, by Hunter Davies, Photograph by C. Pemberton-Pigott, Frederick Warne, 1988.
(4) *A History of the Writings of Beatrix Potter*, by Leslie Linder, Frederick Warne, 1971, 1987.
(5) *The Journal of Beatrix Potter 1881-1897*, by Leslie Linder, Frederick Warne, 1966, 1989.
(6)『ピーターラビットからの手紙』文　吉田新一・塩野米松　撮影　中川祐二　1990　求龍堂
(7)『ピーターラビットの田園から』NHK 取材班他 1989　日本放送協会
(8)『ピーターラビットの絵本』ビアトリクス・ポター作・絵　石井桃子他訳　1971～　福音館書店